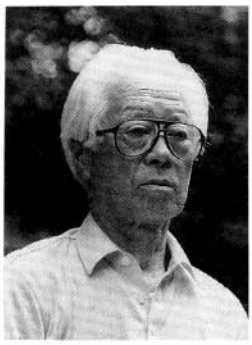
本多静六通信
収載・菊池菊城研究
第８号
発行
本多静六博士を記念する会

賛・本多静六博士

関根將雄



関根將雄氏
（日本画家、埼玉県文化団体連合会会長）

あなたが…、どうして…、

自然科学者と一介の画家との関わりに不思議に思うらしく、時々聞かれることがある。

私が本多静六博士について駄文を連載している新聞を見てのことであろう。いちいち説明するのも長くなる。同郷の偉人だからとか言ってその場を逃れる。

実は本多静六の名は少年の頃から両親の会話の中から記憶に残っている。

さて、数年前ＮＨＫの衛星生放送があって、私に割当てられたのが埼玉県嵐山町であった。

私は内心わが意を得たりと思った。

何故ならば嵐山町の町名は、本多博士の命名によるものだったからである。京都の嵐山（あらしやま）に似た風光ということで、博士の心が動いたのだろう。が而（しか）し、三十分の生放送故か思う半分も槻川のほとりをそぞろ歩きしながら語れなかった。

その思いから、もう少し本多博士の人となりを知って貰いたいと随筆欄を振り当てられた折考えた。

特に今の乱世の時、博士の人となりを知って貰いたい念が強かった。

▲本多博士命名による埼玉県嵐山町（槻川）

さて話を戻して、私の両親の会話の中でといったが、母の父親は渋沢栄一の弟子であった。

母の父は私財を投じ、商工、農工の二つの銀行を創設した。後に埼玉銀行に合併されるのだが。

当時、埼玉学生誘掖（ゆうえき）会の会長が渋沢栄一で、副会長が本多静六であった。私の父親と叔父は共に農学を修め、同じ誘掖会の会員だった。そんな関係で本多博士の話題が時々交わされていたのである。

改めて私は博士の立志のプロセスをフィクションなく、ささやかながら綴ってみたいと思ったのである。

特に博士が林学の分野は当然ながら社会に貢献した業績と社会奉仕への執念がどんな所から来たのか、数々のエピソードをもう一度考えてみたいとの一念からである。

博士の爪の垢ほどでも…、と思いが泉の如く湧いてつきない。

尊敬してやまない博士であるが故に。

著者紹介／関根將雄（せきねまさお）大正八年埼玉県岩槻市生まれ。東京美術学校日本画科卒業。昭和五十三年埼玉文化賞受賞。五十六年埼玉県教育功労表彰。埼玉県文化団体連合会会長。現在埼玉新聞の「標点」に本多静六の伝記を連載中。

目次

本多静六先生の思い出（佐藤まつ子）……2
愛弟子による特別対談
本多静六先生の思い出……4
本多博士の公園設計
福岡県営大濠公園の設計を中心に……6
歴遊の儒学者・菊池菊城……8

本多静六先生の思い出

佐藤まつ子

この度私は亡き夫の友である、嶺一三先生の御依頼により、遠い昔を思い出しながら、本多静六先生のことを書いてみたいと思います。

（夫の）佐藤敬二は東京大学農学部林学科に嶺先生と共に入学、本多先生に師事いたしました。

昭和二年卒、大学院に進み、嘱託として勤めました。本多先生は昭和二年に停年退職され、帝国森林会会長として、赤坂の三会堂に通って居られました。昭和三年九月、私は佐藤と結婚し上京、渋谷神泉に住みました。

渋谷桜丘のお宅に御挨拶に伺い、はじめて本多先生に御目にかかりました。その時先生は「学者の細君は貧乏に慣れることが第一だ」と言われました。今でも忘れません。

それから四分の一貯金、つもり時代が始り、私が思ってもみなかった、苦しい生活でした。

佐藤は卒業当時から四分の一貯金を実行していたようです。見たつもり、買ったつもり、食べたつもり等々でした。月給七十円、家賃四十五円、地代は別では暮らせる筈がありません。思案の末に二人で半分ずつ出し合って家を求めました。佐藤の家には告げずに、たしか二千円でした。大家さんが建てられて二年位の大学に近い渋谷の一等地でした。

臨時収入は全て貯金、佐藤は先生の教えを忠実に守り、苦しい生活が続きました。ある時貧民街に見学に行き、「僕らの生活は良い方だ」と申しました。如何なる突発事が起きても貯金を出す事は許されず、ただ書籍を求める時だけは惜しみ無く貯金から出していたようです。

そのうち演習林で獲れた猪鍋に先生からお招きを受け、二人で伺いました。私が少しでも箸を置くと、先生は「嫌いか、嫌いか」と言われ、少しせっかちな御性格だとおもいました。

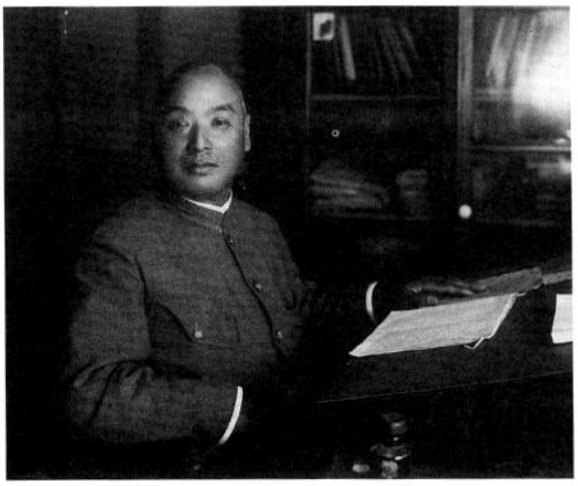
その点佐藤も若い頃は短気で、私を困らせました。何事も明日にのばさず、その日の内に済ます、これは先生の教えで実行致しましたので、私は非常に忙しい毎日でした。

道玄坂の百貨店を歩いている時に、偶然喫茶店から出て来られた先生御夫妻にお逢いしました。「もう少し早かったら一緒にお茶を飲んだのに」と言って下さいました。私共はつもり時代の最中でした。そのうち子供も生まれ、私は麻布の赤十字病院迄電車に乗らず、そのお金で子供に土産を買って帰りました。周囲の方々は郷里からの仕送りで生活しているように思われていたようですが、私共は一切援助は受けませんでした。今から思えば私もよく辛抱し協力したと思います。論文その他校正は二人でやり、清書は専ら私がいたしました。

その頃、時々先生から原稿を頼まれ、お散歩の折に「本多じゃ、本多じゃ」と門をたたかれ、原稿料を御自分で持って来て下さいました。半分を佐藤に、半分を帝国森林会の費用に当てられたと聞いて居ります。佐藤は千葉高等農林と育英中学に教えに行って居りました。そのお金が小遣いになり、臨時費は一切貯金していたようです。

時折先生のお宅に伺いました。石垣に薔薇が奇麗でした。先生御考案の三畳の部屋を見せて下さいました。空間を置いて一畳の上に押入があり、夜横になる時は足を押入の下に入れるとの事でした。物を置く事も出来ます。今福岡のわが家の二階にその部屋を一間造っています。先生のお顔を懐かしく思い出します。佐藤は新宿の寄席にも出向き講義の勉強を致しました。

農学部が本郷に移転した折に、私共も東中野に移り住みました。そのうち佐藤は目黒の林業



▲東京大学教授時代の本多静六博士（佐藤まつ子氏蔵）

試験場に勤めるようになりました。郷里の父が亡くなり、昭和十七年に九州大学に転任致しました。植村先生のご子息も林学に居られました。戦争は激しくなり、佐藤は軍部の要求を拒み、九大の演習林を守り通しました。「首をかけて」これも先生に似て意思強固でした。

▲佐藤敬二氏の東京大学卒業写真（前列中央）。後列中央が嶺一三氏。

戦時中は山林は荒れに荒れ、戦後その修復に数年を要しました。山林経営の家の長男に生れ、迷わずして林学を志望した佐藤は本当に山林が好きでした。原稿料その他何も彼もつぎ込んで山林を購入致しました。植林をして手入れをし、立派な山林になす事が何よりの楽しみだったようです。

本多先生は造園にも造詣が深く、全国各地の殆どの公園を手掛けられ、福岡の東公園、西公園、大濠公園の改良計画にもかかわって居られました。大濠公園には能楽堂もあり、今市民の憩の場として愛用されています。

何も趣味もなかった佐藤は、九州大学停年退職後、頭の運動といって株を始めました。毎日経済市況を聞き、株欄に赤線を引いて楽しんで居りました。これも先生の影響だと存じます。

私は孫が生れた頃から漸く謡曲と短歌を始めました。広い芝生の庭に夫が植えた木々が天突くばかり大きくなり、小さな林のようになりました。私は第三歌集名を「小さな林」と致しました。歌集に収めた先生の歌を抄出いたします。

夫の師の名広辞苑にあり名声は永久なり本多静六先生

詰襟に一生貫かれし師の君の温顔いまもわがまなうらに

究められし林学造園先生の設計になる日比谷公園

招かれて猪鍋に夫と行く渋谷桜ヶ丘本多先生宅

二時間の散歩の帰りわが門をたたき給ひし原稿料持ちて

経済誌に本多静六先生の記事数多なり静かなブーム

四分の一貯金なつかし夫の師の本多博士の処世の秘訣

世界一経済大国日本の何時までつづく保証はあらず

先生は三会堂まで徒歩で通われ、毎日二時間の散歩をなさいました。精力が余ったそうです。佐藤の努力と忍耐の一生も老後には性格も軟らかくなり、孫を可愛がりました。平成三年十一月書斎で机の前に正座したまま一瞬のうちに他界いたしました。八十八歳でした。生涯先生の教えを守り通した佐藤は、久しぶりに先生にお逢いして、色々とご報告申し上げた事と存じます。

今私は直弟子の佐藤に代わり、偉大な本多静六先生の思い出を書かしていただく事を光栄に存じます。有為転変世の中も激しく変りました。私は大勢の家族に支えられ、夫が植えた庭の木々を眺め花々と語り合いながら、八十七歳の余生を静かに送って居ります。

佐藤敬二氏略歴／さとうけいじ。明治三十六年生まれ。大分県出身。昭和二年東京大学農学部林学科卒業。大学院進学、農学博士。国立林業試験場技師。九州大学助教授、教授。学術会議会員。昭和四十二年停年退職。名誉教授。福岡県林業経営者協会会長。福岡県文化財保護審議会会長。停年退職後、西日本短期大学学長。

――愛弟子二人による特別対談――

本多静六先生の思い出

（三箇小学校「文化講演会」より）

平成八年九月八日、本多静六博士の母校である埼玉県菖蒲町立三箇小学校において、同校並びに同校PTA主催による文化講演会が行われ、博士の愛弟子であった東京大学名誉教授嶺一三氏と麹町学園後援会顧問相川行雄氏との対談方式による講演が行われました。

本号では、ご講演の中でお二人が話された、博士の逸話を中心にその内容をご紹介します。

▲文化講演会の模様

相川氏　私と本多先生との初対面は、昭和七年五月、慶応義塾の学生時代に父の薦めで帝国森林会にお訪ねした時であります。その時の先生は、明朗で溌剌としたお声で、活力ある健康体で居られたことと、「金持ち息子は感謝がないから注意するように」との訓示が今尚心に残っています。

翌年慶応義塾高等部を卒業した私は、横浜市金沢区にある本家の相川山林事務所の山林部長の職につきました。先生の「一本伐ったら五本植えろ」を家憲に、山林に杉檜百万本を植林したのも先生のご指導によるものです。

また、昭和十三年の帝国ホテルでの私の結婚式のとき、先生にご祝辞として「努力即幸福」と「職業の道楽化」の言葉を賜りました。この言葉が人生の支えとなり、その後三十年間、地下足袋、巻き脚絆、腰鉈、日本手拭を腰にさげ、血と汗の山歩きを続けられたことに深く感謝しております。

終戦後、伊東市の高台のお宅に三度参上しましたが、床の間に「努力の人生」と「職業の道楽化」の二本の掛物が並んでいたのが今尚心にハッキリ残っています。お訪ねする度に、庭先の小畑から、大根や人参を掘り取り、摺りおろして下され、又一夜漬けの赤カブ、白カブ等をホルモン漬けとしてご馳走して下さいました。

「命は食にあり」で、お顔がつやつやして居られたのが今でも目に浮かびます。

伊東に移られてからも先生は大変お元気で、鎌田のお宅から奥野の相川山林事務所まで、地下足袋でお元気で歩かれ、往復四時間は八十歳代とは思われませんでした。上り坂になると、先生のお腹に太紐をまわし、お腹の中心より七尺位の紐を私の肩にかけて、先生は杖をついて後から歩かれました。

伊東の先生のご自宅は大変合理的に出来ておりました。何事にも質素な先生でしたが、「家庭は仕事や生活の基本となるものだから、お金はかかってもよいから、文化的な生活をするように」といつも話されておりました。

嶺氏　私は先生が帝国森林会に勤められている頃から、樺太の調査に二回同行したほか、大湾や朝鮮などの調査の話も聞きました。それらのことにつきましては、既に公表した（「本多静六通信第五号～第七号所収」）ところでありますので、詳しくお話しするのは控えますが、先生はご著書の『体験八十五年』の結びに、「自分の都合のよいことばかり書いて、都合の悪いことは書かなかったのが申し訳ない」と述べておられますので、ここでは先生のご遺志をくむうえからも、これまで余り先生のお話に出てこなかった、先生の二度目の奥様について、相川

先生から少しお話しを伺えたらと思います。

相川氏　先生の二度目の奥様は、川村家から嫁いでこられた方で、先生とは円満なご家庭を築かれ、中睦まじく暮らされておりました。川村家も大変な資産家でありまして、そのせいか奥様も大変明朗な方でした。

奥様の健康管理がよろしかったのでしょう、先生は八十歳位までは伊東の市内まで買い物に行く時は、リュックサックに地下足袋姿で、徒歩で往復されておりました。

個人的な話になりますが、相川家では今でも先生に大変感謝をいたしております。先生の先見の明により、財産を成すことが出来たからであります。それは父（七代相川文五郎）への「今は不便な土地でも将来道路や鉄道が通ずれば、土地の値上がりがあるから、大面積の山林を買うべし」という明言でありました。

明治三十六年頃買った伊東の相川山林五百町歩は、近年奥野ダムに接し修善寺行きの道路が完成し、山林の価値が上がったので深く敬意を表し感謝を捧げています。

▲嶺一三氏

▲相川行雄氏

嶺氏　本多先生は何でも積極的に取り組む方でしたが、思い出に残っているのが先生が書かれる文字のことです。先生は大変筆まめで、毎日文筆活動に取り組んでおられました。講演の原稿や自宅での執筆の清書は多くは奥様がなさっていたようですが、森林会や出張先（調査先）での清書は我々の役目でした。判読しにくい文字が多くあったことから、仲間と協同して先生専用の判読辞書のようなものを作ったものです。

そのせいか、先生はあまり揮毫（きごう）などはなさったことはなく、今残っている先生揮毫による石碑は青森県野辺地町にある「防雪原林」と奈良県の吉野にある土倉翁の碑の二つだけでないかと思っています。

相川氏　私は先生から「感謝の気持ち」を学びました。健康への感謝、自分を育ててくれた方々への感謝、社会への感謝等々です。

先生も埼玉県に八千町歩の山林を買われ、県に四千町歩を寄付されました。この寄付の条件に人材養成の奨学資金に使うことといわれ、すでに千名を超える学生がこの恩恵に感謝していると承っています。

ですから、今私はこの先生の尊い御精神を模範とし、大いなる遺産は人材育成の教育事業にありと悟り、微力ながら国際ロータリー財団をはじめ米山梅吉記念財団、（六代の理事長をした）麹町学園などに寄付をさせていただいております。

先生の「進取の気性に富み、枯れるな溌剌（はつらつ）として積極的に生きよ」の生き方が、明治四十五年生まれの八十七歳の私の健康長寿法に大いに役立っています。

嶺氏　お話ししたいことは沢山ありますが、先生の「どうでもよい家庭内の些細な意見の食い違いは“じゃん憲法”（じゃんけんで負けた方が相手の意見を認める）でさばく」とか、「四分の一天引き貯金」「人生即努力、努力即幸福」「職業の道楽化」などといったものは、今でも十分通用するものだと思っています。とにかく先生の教えをいくらかでも実践して、平和で楽しく暮らしていけることが何よりだと思っています。

（文責…記念する会事務局）

講師紹介／嶺一三（みねいちぞう）明治三十七年生まれ。福岡県出身。昭和二年東京大学農学部林学科を卒業。東京大学講師、助教授、教授を歴任。現在名誉教授。

相川行雄（あいかわゆきお）明治四十二年生まれ。神奈川県出身。昭和八年慶応義塾大学を卒業。山林業役員、日本林業経営者協会理事等を歴任。五十二年麹町学園理事長、現在後援会顧問。

本多博士の公園設計

ー福岡県営大濠公園の設計を中心にー

菖蒲町企画課　渋谷克美

■大正十三年に東西両公園、大濠公園を設計

大正年間、日々発展を遂げる福岡市では、九州第一の都市として、公園の改良・新設に力を入れていた。特に市の名勝地として知られる東公園、西公園の改良と大濠水上公園の新設計画は、県当局にあっては焦眉の課題であった。

大正十三年九月、県当局は年長の懸案であったこれら三つの公園の改良・新設設計について、当時公園設計の第一人者であった本多静六博士に委嘱した。

博士はこの申し出に対し、「未熟ながら過去数十年に亘りて親しく見聞せる海外幾千の公園の実況を参考とし、国内数百の公園設計に従事せる経験に鑑み」として快諾した。早速博士は、その年の秋に弟子の東大農学部講師の氷見健一とともに、一週間にわたって福岡に滞在し、現地調査を行った。

調査は順調に行われ、その年の十二月十六日に県当局に対し「福岡県営東公園・西公園・大濠公園改良計画」が提出された。

この計画書の提出に対し、県当局は翌十七日の新聞発表（福岡日日新聞）の中で「本多博士、氷見学士に委嘱した東西公園と大濠水上公園の設計は出来上がったが、県の方では予算の関係もあってこの設計を直ちに採用するかどうかは判らぬが、十分資料とするつもりである。ただ工事の実施期は確然明言することはできぬものの、現に東西両公園の公園費は三万円ばかりあるから、これが起工もそう延引することはあるまい」とコメントを発表した。

さらに新聞者側は、このコメントに対し、「大福岡市に三つの水陸公園が異彩を添えるのも近き将来のことであろと期待されている」と一般市民の側にたった意見を述べている。

博士から提出された公園設計の概要は、その日のうちに新聞社にも発表されたようで、福岡日日新聞では十二月十七日と十八日の二日間にわたり、「愈出来た福岡の三大公園」と題して、公園設計の概要を報じた。

■大濠公園のおいたち

現在の大濠公園の濠は慶長年間（一六〇〇～一六一四）、黒田長政が福岡城を築城する際に、博多湾の入江であったこの地を外濠として利用したことに始まる。福岡藩は関ヶ原の戦の功により、長政が徳川家康から石高五十二万石余で封じられたのが始まりで、幕末まで黒田氏の支配が続いた。

しかし廃藩置県後、この外濠は殺風景な沼と化し、蓮根掘りに利用される程度であった。この状況について、当時の新聞は「福岡西部に大濠水上公園が人為的に新設されることは、近年著しく西に南に発展していく大福岡市と福岡市民のためには何よりも恵まれる慰安であろう。現在舞鶴城をめぐる大濠は、水面十三万坪の広茅であるが、名城をめぐる大濠も現在では殆ど殺風景で県当局がお濠の蓮根掘りよりも、これを水上公園に宛つべく着目したのも全く時代の然らしめたことであろう」と評している。

ここに、県当局が現状のお濠を水上公園に新設すべく着目したとあるが、これは昭和二年に東亜勧業博覧会が福岡で開かれたことが大きな契機となっている。県ではこの博覧会を機に公園の造成工事を行い、昭和四年に大濠公園として開園したものである。

現在大濠公園は、福岡市のほぼ中央に位置し、総面積が約四十万平方メートル、池面積が約二十一万平方メートルの全国有数の水景公園となっている。

■大濠公園設計の概要

先ず博士は隣接する官地の合併を公園設計の前提条件として掲げ、池の外周を走る車道（県道）の新設、内周を走る遊歩道の新設を提言し、併せて池の水面の清掃と浚渫を行うこと、池中に大小三つの島を築造すること、公園内全域にわたり各種の運動娯楽施設を設けることを基本方針として提言した。

さらにこれらの基本方針を基に、設計図面にあわせ十三項目にわたって計画を示した。因みに十三項目の内容を簡単に紹介すると次のようになる。

①松並木堤下の幅の拡幅と休憩場所（施設）の整備。

福岡県民の憩の場となっている大濠公園。濠の中にある「菖蒲島・松島・柳島」は本多博士の命名によるもの。

②濠の周りを走る自動車道の整備と一段下げた場所への遊歩道の整備。
③車道と遊歩道との間の植栽管理。
④陸上競技場小運動場の整備。
⑤釣堀等の娯楽施設の整備と景観形式。
⑥水辺住宅敷地の整備と提供。
⑦濠内に柳島、松島、菖蒲島の三島を設け、船の運航を妨げないように橋で結ぶこと。
⑧三島の植栽並びに飲食や釣りの出来る休憩所の整備。
⑨競艇場、ボートハウスの整備。
⑩濠の水の循環・更新。
⑪魚類の放流と遊漁施設の整備。
⑫濠の浚渫と水深の確保。
⑬海上遊船の係留場の確保。

■ 大濠公園設計に対する新聞の評価

大正十三年十二月十八日の福岡日日新聞は、「愈出来た福岡の三大公園」の見出しの次に副題として「海と山の西公園と連絡して大濠に新しく水上公園、本多博士氷見学士の設計」とし、全体的には好意的に設計の内容を紹介している。

ただ若干の表現として、例えば官地の合併については、「実現するについては、ちょっとまたこの問題が県当局の頭痛の種となるだろう」と評したり、濠内に柳島、松島、菖蒲島の三島を設けることについては、「島の名前まで付してあるが果たしてそのまま採用されるか？」と多少皮肉った表現を用いている点が面白い。

しかしながら、他の内容については「実現の暁には西公園と連絡した快濶瀟洒な美観を一層濃やかにすることであろう」とか、競艇場については「東京の向島や琵琶湖等に見るようなボート競争も近く大濠水上公園を賑わすことだろう」「新装の大濠公園も東公園の改造と同時に福岡市民にとっては待ち侘びらるる大きな慰安の場所であろう」と評価している。

■ 現在の大濠公園

都市公園として整備の進んだ大濠公園は、現在池の周囲が約二キロメートル、野鳥の森、児童遊園、能楽堂、日本庭園やボートハウスなどが配備され、市民はもとより観光客の休養、娯楽、体育の向上に役立てられている。濠の水は浄化設備が施されたことから、かなり澄んだ水が濠をたたえている。しかし、公園の原状は設計当時のままである。

一日中人の姿が絶えることのない、まさに市民の憩いの場所としてすっかり定着した公園である。しかし、この公園が今から約七十年前に、本多博士の手によって設計されたということは地元の方も殆どご存じないようである。

大濠公園が出来てまもなく七十年を迎えようとしているが、公園は公園として、市民とともに独自の歩みを続けているようである。

大濠公園が大都市のオアシスとしての機能を有すること、そして改良ではなく新設という点からすると、大濠公園は日比谷公園の兄弟公園とも言えるべきものではないだろうか。

歴遊の儒学者 菊池菊城

菖蒲町企画課　渋谷克美

江戸時代の後期から末期にかけて、武蔵をはじめ、相模、伊豆、駿河、甲斐、越中、越後の諸国で活躍した儒学者菊池菊城。

本多静六と並んで菖蒲町出身の「郷土の偉才」とも言うべき、この儒学者菊池菊城についても、本多静六博士を記念する会で扱うことになったことから、通信第8号から菊城についても掲載することになりました。（編集後記参照）

▲菊城の肖像画（東京都町田市・佐藤家所蔵）

■明治の重鎮、渋沢栄一の師

本県を代表する大実業家渋沢栄一や尾高惇忠等を育て、日本の近代化に大きく貢献した菊池菊城の名は、本町はもとより本県においてもまだ余り知られていない。

菊城は「歴遊の儒学者」の異名のとおり、若くして諸国を遍歴し、好んで山間僻地に至り、子弟を集めては教授したといわれ、その教えを受けた者は、一説に二千人とも三千人ともいわれている。

特に幕末期にあっては、相模、武蔵を中心に活動し、その交友者の中には、幕末、反幕府勢力の鎮圧にあたった新選組の近藤勇、土方歳蔵、沖田総司などの名前が挙げられている。

■菊城の生まれた頃の台村・菊池家の様子

菊池菊城は、今をさかのぼる約二百年前の天明五年（一七八五）、武蔵国埼玉郡台村（現在の埼玉県菖蒲町大字台）に生まれた。幼名を政太郎、諱を武睿、字を明君、菊城と号した。菊城が晩年を過ごした、東京都町田市の小島家に残る日記（「小島家日記」小島資料館蔵）には、父の名は菊池弥五郎、母の名は俊（しゅん・下野国佐野・小倉家）とあり、菊城が菊池家の長男として生まれたことが記されている。また、菊城が江戸での勉学の後、諸国を歴遊したため、菊池家は弟の恒三郎が跡を継ぐことになった。

当時の菊池家については、詳しいことは分からないが、現在の家人・菊池照子氏の話によると、江戸時代は何等からの村役人（名主、組頭等）に就いていたようで、つい最近まで残っていたという構え堀の存在からも、菊池家は相応の地位と経済力を誇っていたものと思われる。

概して菖蒲領と呼ばれたこの地域一帯は、江戸時代を通じて大きな災害に見舞われたことは少なかったようで、菊池家も比較的安定した経営が続いていたものと思われる。

しかしながら、菊城が生まれた天明五年は、同二年（一七八二）から始まった「天明の飢饉」のまさに最中であった。天候不順による農作物の不作は各地に深刻な影響を与えたが、更に同三年七月には信濃国の浅間山が大噴火し、追い討ちをかける形となった。現在の菖蒲町近辺でも浅間山の火山灰が降り積もり、農作物に被害を与え、村々からは年貢減免の嘆願書が出されたほどである。

この「天明の飢饉」も同七年（一七八七）頃には好転してきたが、暫くの間はその影響を引き継いでいたものと思われ、一般農民は苦しい生活を強いられた。

こうした状況にもかかわらず、この時期、菊池家の長男として生まれた菊城は、幼少の頃より勉学に親しむ環境と、剣術を習得する機会に恵まれたのである。このことは、菊池家の学問・武芸への深い造詣と共に、富農としての揺るぎない経営振りがあったことが容易に伺えるものである。

■少年期から青年期にかけて

菊城終焉の地となった神奈川県愛甲郡愛川町に残る勝楽寺の菊城墓碑には、次のような一文が残されている。墓石とその碑文は、菊城の亡くなった翌年、近在の門人九人によって慶応元（一八六五）年に建てられたものである。（原文は漢文体）

「先生諱を武睿、字は明君、菊池氏、菊城と号す。又、日く筑紫の黄衣正観公の裔にして、武州台村の人なり。幼より学を好み兼て撃剣を善くす。始め辻氏に学ぶ。弱冠（二十歳）江都に学び、北山、山本先生に業を受けることと数年、学既に成り、天下を周流して殆ど五十年。先生は人為り勇壮にして明断、音声鐘の如く、容貌威れいにして人に接する忠誠をもってす。平居世道を深く嘆く。漸く降日偸薄に入り、人事詩文は道徳を講ずせず。慨然として鼓舞せんことを欲し、一時学風を振起す。而してついにその志を信ぶるを得ざるなり。去る冬（文久三年十二月）一日半原嶺を踰ゆ、たまたま深雪に遇い、進退ここに谷まる。乃ち樹陰に宿る。煤ケ谷の山田氏これを知る。人を遣わして迎え養う。ついに疾を得、文久四年甲子正月七日、荻野の石井氏に於て距生し卒んぬ。天明五年乙巳、庚を得て八十。某を配すも前に卒す。一女某氏に適く。門人貲を捐て、相州田代勝楽寺に葬りて碑を建つ。徳を表すの銘に曰く。

天、丞民を生む。必ず師を降す。先生の道徳は斯準、斯規、勤学を厭わず、人を誨えて倦まず。麁衣、疏食、名を避け賤きに安ず。逝川返らず。喬木枯れ卒ぬ。嗚呼命なる哉、弟子ちまたに泣く。

慶応元年歳次乙丑建子月

門人染谷勝元　井上清澄　同撰

門人①山田喜高　②田島元竜　③井上清澄
④染谷勝元　⑤井上忠順　⑥染谷確操
⑦石井金吾　⑧石井常教　⑨柴田宗昔

勝楽寺に残る墓碑からは、菊城が幼少のころから勉学を好んでいたこと、さらに剣術を得意としていたことが解かり、菊池家の文武両道を重んじる気質が伺われる。

「初め辻氏に学ぶ」というが、辻氏の素性は不明である。

いずれにせよ、二十歳まで台村で過ごした後、大志を抱いて江戸に出、以来、山本北山の門人として、さらに数年勉学に励んだ。

▲菊城の生家にあたる現在の菊池家（埼玉県菖蒲町大字台地内）

◀菊城直筆の漢詩（東京都町田市・小島資料館所蔵）

山本北山は、江戸後期の儒学者で折衷学派に属し、古文辞派を批判し、宋詩風勃興の機運を作ったとされる人物である。菊城が二十歳で入門した時、北山は五十三歳で、既に学者としての名声を江戸中に響かせていた時期である。

山本北山の下で、菊城が儒学を中心に学んだことは解かるが、江戸での勉学が何故菊城を遊歴の学者へと導いたのか、大いに興味の沸くところである。「山本先生に業を受けることと数年、学既に成り」とあるから、二十四、五歳の頃から、約半世紀に及ぶ諸国遍歴の旅が始まったと思われる。

■旅学者菊城の素顔

「天下を周流して殆ど五十年」といわれる菊城とは、一体どのような人物であったのか。墓碑には、「先生は人と為り勇壮にして明断、音声鐘の如く、容貌威れいにして人に接するに忠誠をもってす。平居世道を深く嘆く。漸く降日偸薄に入り、人事詩文は道徳を講ずせず。慨然として鼓舞せんことを欲し、一時学風を振起す」とある。

小島資料館館長の小島政孝氏は、前掲の「小島家日記の中の小島鹿之助」の中で、当家に伝わる『菊池菊城伝』（二十一代当主守政著）を基に菊城について次のように述べている。

「菊城は論語を得意とし、鹿之助は感銘を受けた。菊城は性質は豪放にして、二十歳より山本北山に学び、のち遊歴すること数十年、群書を博覧した。酒を愛し、講義の前には必ず椀の

酒をぐっーと飲みほしてから講義をするのが常であった。声は鐘のように大きく、はっきり話し、遠くにいる人も耳を傾けたという。

かつて中山道の茶店で菊城が休んでいると、一人の武士がずかずか入ってきて誠に無礼な態度であった。菊城は、これに腹をたて、ついに刀を抜いて格闘となった。このとき菊城は七十歳に達していたが、この壮健さであった。（中略）菊城は蒼顔で、白髪に一尺余りあごひげをはやし、常に長刀を佩（はき）していた。祖先は菊池武光といい、南朝をなつかしみ、児島高徳桜樹に題すを好んで語ったという。外出の折には必ず桜の枝を供にし、腰にひさごと杯をさげて歩いたという。居所は一定せず、ふらりと来て、気に入ると何日もそこにいて講義し、またふらりと旅に出るという漂浪の人であった」。

また、吉岡重三氏は「原点」（昭和五十九年『青淵』四二二号所収）で、町田市小島家と新選組、さらに菊城との関係について次のように述べている。

「菊城師は嘉永四年（一八五一）十月、武州多摩群小野路村小島家に招聘されて、当主政則と子息鹿之助に教授している。因みにこの小島家先祖は応永年間というから、六百年の系図を誇る名門で、当主宗一郎氏は二十三代、現在東京都町田市小野路町で小島資料感を経営しておられる。（中略）特に興味深いのは、小島家に新選組の近藤勇、土方歳三、沖田総司等が常に出入りして、鹿之助はその剣法天然理心流の道場を構え、明治維新後は自由民権運動を支援したという。（中略）小島家の日記に因ると、若主人鹿之助（為政）は二十二歳、この人は三国志の故事にならい近藤勇と義兄弟の縁を結んだという。だから師（菊城）はここで新選組の三巨頭にも学問を講じ、反面彼等から天然理心流の剣法を習得したと考えられる。以降万延二年まで、菊城しはしばしば同家を訪れ、また文通を交わした資料が残っている」。さらに、愛川町の足立原晴男氏所蔵の画幅に記されている菊城の漢詩の一文である『厭悪譏嫌一慨然　玉堂金馬他非』の解釈として、「世俗の金銭等に汲々たるは誠に嘆かわしい。立派な家や、ぜいたくな乗り物など絶対に欲しくない」としている。

▲菊城直筆の漢詩（神奈川県愛川町・足立原晴男氏所蔵）

■渋沢栄一との関係

渋沢栄一と菊城との関係について、当時青淵渋沢栄一記念事業協賛会副会長であった吉岡重三氏は、前掲の「原点」の結びの中で次のように述べている。「私は今、中身に手のつけられない膨大な（菊城の）遺品の山を眺めながら、近世日本の地方文化の厚みや懐の深さに驚いている。学問と文化の創造はすでに、江戸と京都の専有でなく、大名とお寺の独占物でなく、ひとりの渋沢栄一を生み出した背景に、このような実力ある旅学者、学殖豊かな地方文人の裾野があって、明治維新の夜明けを待っていたのかと感慨にふけるのである」。

さらに同氏の研究では、天保末期から弘化の初期頃（一八四三～四五）に、武蔵国榛沢郡血洗島村に、渋沢栄一の伯父・渋沢宗助（誠室）の居宅を使用して、「本材精舎（ほんざいしょうしゃ）」なる私塾を開設し、弘化二（一八四五）年頃までの二年間子弟を教授したのではないかとしている。

また菊城が渋沢家を訪れた理由について、「伯父誠室は上野寛永寺の僧、仏庵を自宅に招いて書道を習う。この知己を通じて山本北山の弟子、菊池菊城を自宅に招いたのではないか」としている。

しかし、この時、栄一は三歳から五歳の年齢にあり、直接菊城から教えを受けたとはいい難い。渋沢が菊城の教えを直接受けたのは、その後の安政元、二年（一八五四、五）頃のことである。その頃のことについて、渋沢は大正三年

▲菊池菊城の墓碑（裏側に碑文が刻まれている）

▲菊城の墓が残る神奈川県愛川町・勝楽寺

七月号の『竜問雑誌』の中で、談話として次のように語っている。

「菊池という人は私の十四、十五歳頃までは月に何回か尾高の家へ来たのであったが、私も都合三、四回はその講義を聞いたことがあった。何日であったか公冶長編（中略）を私がよく解釈したというので、褒められた事を今でも覚えている。其の後も一度か二度よく解釈して褒められた。しかし私は学問の間に農事に従事せねばならぬので親から少し止められた…。」

この時が、菊城と渋沢との実質的な初めての出会いであったと思われる。

さらに、吉岡氏は、その研究の中で、『渋沢栄一伝記資料』第一巻六十五頁の中に、尾高藍香の学説を説明した記述として、「更に遊歴儒者として此村に来れり菊池菊城に就いて経義を講じたのみで、殆ど独学でやったのであるが、なかなかの学者として近郷に隠れなき名声を博していた」という記述と、幸田露伴著『渋沢栄一伝』二十頁に「勿論其間に遊歴儒者の菊池菊城には論語の講義を聴き」を発見されている。

一方、菊城は渋沢のことについて、公冶長編の「子、子貢に謂ヒテ曰ク、女ト回トイズレカマサレリ」ノ章に述懐して、「十一月二日午前、土鍋ヲカケ酒ヲ飲マントシテ悟リヌ。夫レ小人ハ人ノ才徳ヲ見レドモ、目ニクモリアリテ明カニ知ル事ヲアタワズ。（中略）相州津久井ノ十七ノ童子、血洗島ノ余ガ門人某（渋沢のこと）ニハ、我ガ少年ノ時ナド決シテ及バズト思フ」と述べている。（「渋沢史料館だより」（昭和六十一年『青淵』第四四九号所収）

■菊池菊城の晩年

小島資料館に残る史料によると、菊城は嘉永四（一八五一）年十月、六十六歳の時に、武州多摩郡小野路村小島家に証聘されている。

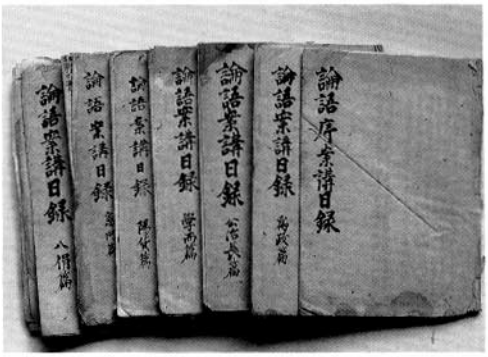
以後、現在の東京都町田市、神奈川県愛川町近辺を中心に、私塾を開いては門人たちを集め教授していたようだが、安政二（一八五五）年頃には、武州榛沢郡血洗島村の尾高家にもしばしば訪れ、子弟を教授していたようである。

つまり、還暦を過ぎた後も武蔵、相模を舞台に活躍していたのである。

現在の愛川町城での菊城の教えの舞台は、田代村より発し、近隣の中津川渓流に沿って溯り、約二年六か月の間に萩野村、半原村から南山を越えて丹沢に向かう煤ケ谷村（現清川村）の奥地にまで及んだといわれ、特に半原村の染矢家は、菊城が最後に出張教授を行った場所と推定され、菊城関係の史料が保管されている。

菊城は八十歳という高齢で亡くなったが、小島氏はその著書の中で、菊城の死について次のように述べている。

「文久三年（一八六三）の暮、菊城は一農家に泊まったが、その夜大雪が降った。翌日出立しようとすると、農家の主人が雪が深いからもう一晩泊まりなさいと言って止めたが、これを断って出立した。山径になるにしたがって雪が深くなり、ついに雪の中で夜になり歩行はもっ



▲菊城が記した「論語案講日録」（神奈川県愛川町・染矢太郎氏所蔵）

とも困難をきわめた。付近に人家すらなく、前にも後にもつかれて進めなくなってしまった。

翌朝、近くの猟師が雪の中に倒れている菊城を発見し、医師の看護を受けさせたが、数日して疲労がもとで文久四年（一八六四）正月に八十歳の生涯を閉じた」

また、上村喜代子氏は「菊池菊城を訪ねて」（昭和六十年『青淵』第四三三号所収）の中で、菊城が没したのは荻野山中藩藩医・石井家とし、菊城の死の言い伝えとして、菊城門弟井上清澄の子の三男であり、同じく菊城門弟で医師の田島元竜の養孫でもある、田島鳳松氏の言葉として、「子供の頃、養父（元竜の実子太一）がよく菊城の話をしてくれました。それによると菊城は煤ケ谷に特別何か関係があったらしい。雪になるからと門弟たちが止めたのに、"約束したことだ。大丈夫"といって清雲寺の脇から門弟達に見送られて、山越えで煤ケ谷に向かったそうです」と記している。

いずれにせよ、菊城の死は門人たちにとって突然の出来事であったに違いない。その死を惜しむかのように、愛川町近在の門人たちによって、死の翌年勝楽寺に菊城の墓が建てられたのである。

■参考文献・資料
○『埼玉県教育史』第一巻　埼玉県教育委員会（昭和四十三年）
○『埼玉大百科事典』第二巻三十頁　埼玉新聞社（昭和四十九年）
○『埼玉郷土辞典』一八〇頁　埼玉新聞社出版部（昭和四十一年）
○『角川日本姓氏歴史人物大辞典十四　神奈川県姓氏家系大辞典』二十八頁（平成五年）
○吉岡重三著「原点」（昭和五十九年『青淵』第四二二号所収）
○植村喜代子著「菊池菊城を訪ねて」（昭和六十年『青淵』第四三三号所収）
○「渋沢史料館だより」（昭和六十一年『青淵』第四四九号所収）
○小島政孝著「小島家日記の中の小島鹿之助」（昭和五十六年『多摩のあゆみ』）
○小島史料館（館長小島政孝）　東京都町田市小野路町
○幸田露伴著『渋沢栄一伝』二十頁
○『渋沢栄一伝記資料』第一巻六十五頁
○渋沢栄一談話『竜門雑誌』（大正三年七月号）

編集後記

本号から本多静六博士と併せて菊池菊城も本会で扱い、同じ郷土の偉人としてその業績を顕彰していくことになりました。

菊城の弟子の一人にあげられる渋沢栄一。そして本多のよき理解者でもあった渋沢栄一。菊城と本多は活躍した時代が異なったため直接会う機会はありませんでしたが、その掛け橋的存在といえるのが明治の重鎮、渋沢栄一です。

さらにこの三人が共通して関連するのは一橋藩の存在です。江戸時代一橋藩の支配下にあった台村（菊城の生家である菊池家は台村の村役人を勤めていた）。幕末一橋藩に仕官した渋沢。そして同じく一橋藩の支配下にあった河原井村（本多の生家折原家も名主役勤務）。そして本多の養父となった本多晋は一橋藩が中心となって結成した彰義隊の隊長でもありました…。このように考えてみると、菊城―渋沢―本多のラインには必ず一橋藩が関係しているようにも思えます。

これらの検証については今後の研究に待たれる訳ですが、非常に興味深いものと思われます。

本会では本多静六とあわせて、菊池菊城についての資料も収集しています。皆さんの情報をお待ちしています。

【編集発行】　本多静六博士を記念する会
〒346－01　埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字新堀三十八番地　菖蒲町役場企画課内
電話　〇四八〇（八五）一一一一（代表）